

京鹿子

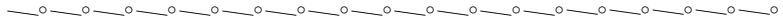
平成二十四年六月一日発行
通巻二〇四回(通巻二冊二日発行)

6月号

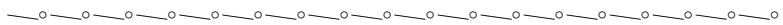
豊田都峰

灌響集 その三十四

田楽と酌めば山端の月を得む
春分は雑木林の煙雨とす
四温なるひと日は林さぐりけり
全山の芽吹きや浄土総本山
芽吹きまた他力を念ず風の中
白梅や灯明祈りの数として



花だよりちらほら祇園もそのあたり
濡れつくしくれゆく樹々の春めける
花ぐもりそのまま暮れてしまひけり
桜まじ雨つれきしか灯を囲む
山吹の咲き川すぢとなりけり
かきよせの風は川すぢなる山吹
山吹のふれゐる里のたつき水
今もなほ説くはさだめや花まつり



梅雨の蝶

丸山佳子

紅 薔 薇 や を ん な 三 十 ま で は 夢
時 の 日 の 職 に は げ み し 手 を 洗 ふ
梅 雨 傘 に 音 荒 け れ ば 歡 喜 わ く
荒 梅 雨 の 中 も と め 來 し キ ヤ ベ ツ 切 る
梅 雨 蝶 と し て 翅 を 閉 づ る ほ の かな 詩

秀華採集

啓蟄や実印に息吹きかくる

金子 野 生

すべてが動き始めるころに、「実印」を鮮やかに押さなければならぬのは、おおきな決意である。季語の設定、その結果の組み合わせに作者の心が描けている。

あふぎ見て一枚の空水仙忌

井 尻 妙 子

芦の芽へやんややんやの波頭

杉 山 はつ江

忌日は一人の間を振り返る時、「一枚の空」なる人間像は尊敬そのものである。後句ののぞきかけた芦の芽へ「やんややんや」の波のよせ具合がなかなか春の寄せ具合も思わせてよい。

鈴鹿 仁

つばくらめ

つばくらめ夢をあづけるひとりの士

剣客と謂ふ名眩しき亀鳴かす

さくらしべ降るいつぶくの鐘の韻

老鶯の山ゆるぎなき唄ごころ

単行本一氣に読みて麦の秋

近 詠

和田 照海

フクシマ忌

違へ暗く鳩の時計や水仙忌

元就の郷鉄壁の畦を塗る

鮑海女競ひ潜りの隠岐日和

白地図の裏も白地図フクシマ忌

群青の海は戻らずフクシマ忌



積雪の幸 北村香朗
 閏年に積雪の来て幸あらむ
 春の雲東京マラソン三万人
 執拗なびわ湖マラソン春の雨
 雛の日や曾孫はやも中学生
 春の雲午後小さき使いみち

強東風 藤岡紫水
 強東風や荒磯に返す膨れ汐
 啓蟄や土になじまぬ椅子の足
 放牧の乳房豊かに下萌ゆる
 一雨は利休鼠か猫柳
 莖立や寺坊の奥の普茶料理

揺れてゐるどの吊草も春を待つ
 煮凝りの中で語るは悔ならん
 豪雪の村に一人の有識者
 焚火の輪人間臭き人ばかり
 熱爛や隙間なき世になじめざる

松田都青

網代笠 竹貫示虹
 山門を薫風と出る網代笠
 苔の花石のよはひははかられず
 白雲のゆくにまかせ植田水
 朝の戸を開ければ匂ふ花蜜柑
 夏落葉踏むかそけさを餘生とす

妹逝く 丹生をだまき
 御神酒徳利の片方欠けて冴え返る
 棺の中蘭で埋めて送り出す
 春雷の鳴りしも知らず茫然と
 金色の霊柩車濡らす春時雨
 今はもう形見となりし雛色紙

椿 柴田朱美
 触れられてほしくない過去落椿
 つかの間のうぬぼれ椿は血を流す
 なまぐさくなつてゆくなり病む椿
 行き交ふは他所者ばかり椿落つ
 駄菓子屋のまだある路地の落椿

神麓集

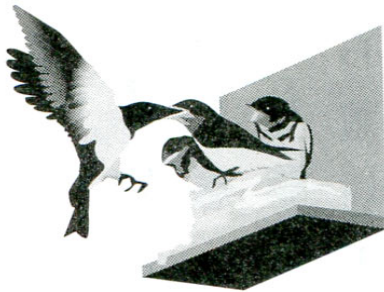


白鳥丸井巴水
神頼みせし絵馬溢れ寒の梅
ぴかぴかの寒月へ向く眼鏡橋
犬ふぐり青年医師の赴任ビラ
芽柳やカヌー一艇進水す
白鳥の帰りし池の置手紙

北窓に唇ひらく阿修羅かな
福は内欄間に鬼が二三匹
春は曙おれは総理に向いてゐる
父といふ背番号あり春一番
伯林に一まい懸ける朧月

人の世のひと日を消して春嵐
天空の夢の通ひ路花と雷
水翳の深しうぐひす谷渡り
亡父の捲くボンボン時計夜の朧
人を待つ桜の指輪まはしつ

塩貝朱千





京鹿子集

豊田都峰選

観音の半歩踏み出す春隣り

青梅 金子 野生

春泥に一思案して桂馬跳び

春めける切妻屋根の異人館
芦の芽へやんやんやの波頭

初めよりいぶし銀とは猫柳

春隣世界一つになる教へ

アリソナ 伊吹 之博

啓蟄や実印に息吹きかくる

春の星帰国の友に寄せ書きす

あふぎ見て一枚の空水仙忌

京都 井尻 妙子

事終へてサンタモニカの春夕焼
亡き祖母の支へはいまも入り彼岸

こだはりは左足より春めけり

春の雪舞ひきて頬の涙となり

蝌蚪の国乱すりす組うさぎ組

新天地へあまた振切る梅二月

オハイオ 水谷 直子

眠る子のずつしり重い蝌蚪曇り

春の星期待ふくらむアメリカの空

玄武護る北の山河や春隣る

杉山はつ江

初午祭傘寿の賽銭奮発す

外つ国を眞白に染めし春の雪

便りくる雛めぐりとも旅日記

渋川 東 秋茄子

残雪や黙々と老夫背を丸く

春めくや赤子の素足ぶくぶへぼ

この月のカレンダーは雪マーク

大寒の工事灯のひとりごち

実千両鳥の好みを見届ける

庭にすずめ大雪予報適中す

カートには目だけ出す嬰の防寒着

さいたま 神田 惣介

電話あり友逝去の寒の朝

薄氷やはきつと物言ひ転院す

雪しんしん留守居に繻く方丈記

冬座敷百科事典の手擦れなほ

ガラス戸の曇りを取れば梅一輪

春雷や嵩なき米を研いでゐる

逝く者は昼夜を分かず冬銀河

雁帰る里の暮しに添ひながら

天皇の心痛皇后の悲痛春よ疾く

餓ゑし日の遥かなりしよ野蒜摘む

泰然と春を待ちゐる大白磁

方便を悔いてをりたり春炬燵

春は黄花フエルメールの黄もその一花

春の宵いでゆ梯子のそぞろ客

露地うらをとつとつと来て寒桜

佐保姫の迷ひし森やたちろげり

腰痛の歩めば消ゆる水の春

東風吹きて能因塚の匂ひ立つ

流水へはるかな思ひ母より泣かぬ

飯の世の言葉は無限べに椿

藪の雪ばさりと午後のひかりかな

九人家族になつてハワイの冬銀河

拾つたら椿が涙ためてゐた

お寒むの夜はものぐさ四畳半

母に降る雪とは違ふ雪が降る

好好爺福豆かじり続けたり

梅いまだ北の端たれか掴みゐる

冴返る骨こきこきと夜歩く

ひとさまの少しお役に花菜漬

るす守る蠟梅の香よ陽に乱れ

まつすぐに水の真昼や迎春花

足裏を刺す福豆のスニーカー

春昼の闇のいちめん猫科の目

猫二匹影のころがり下萌ゆる

佐々木紗知

岡山 敦子

千葉 河内 桜人

浦安 安田 一郎

伊藤 希眸

松戸 児王 有希

直江 裕子

高野 春子

布川 孝子